

レモンとチョコレートの狭間

木村藍

賢いあなたは、あなたを劈くことばに置いて行かれて、

科白のない世界で生きていくことができない

口を衝いて零れていかない言葉に喉を塞がれて、

血と記憶を繋ぐ蜘蛛の糸を見逃して、

なんて新奇な言葉なのだと、

青白くなっていくその頬に、

断線しそうなケーブルを繋いで、

わたしの上気する頬から直接生命を分けてやる

あなたの顔が同化して見えなくなりそうな冷たい病室でレモンに爪を立て、

少しずつレモナールが嗅覚を刺激して意識が戻りそうになると、

レモンを食べたらチョコレートのことを想像できないの、と

あなたは泣きながら虚になった肺を撫でた

コート掛けで首を吊っている恭しさに

おやすみを言ってやると

ノートが馬に乗って駆け出す

レモン色の朝が来る